

国の高校教育改革の動向について

次期学習指導要領の改訂論議の中で高校改革を捉える視点

- 現行学習指導要領の熟成の先に質と公正と実行可能性を統一的に実現する。
- 学校(学力)と社会(実力)との関係を問う、コンピテンシー・ベースの改革の趣旨の再確認。社会的・政治的な自立に向けた真正で探究的な学びの必要性。単線的な社会的成功イメージの問い直しとDXの世界観の実装。
- GIGAスクール構想による公教育の構造変容と人口減少社会における持続可能な学習権保障システムの必要性。修得主義をベースにした教育プログラムとしての高校(学歴社会→学習歴社会へのシフト)。通常学級の支援学級化、僻地教育的状況の一般化、コロナ禍の時のような登校できない状況の一般化。孤立化ではなくネットワーク化により、新たな高校コミュニティ、高校生コミュニティを創出する。
- 経済政策(人材育成)に解消されない教育政策(市民形成、人間形成)としての意味。自由と選択、多様化の中で問われる共通性(コモン)、みんなで集わされることの意味。市民形成と異質な他者(ヒト・モノ・世界)との出会いの重要性。能力増強ではなく能力発達・人間的成長における不利益やわからなさ・気持ち悪さ(いい意味でのモヤモヤ)の意味の再確認(ネガティブ・ケイパビリティの重要性)。

次期学習指導要領の改訂論議の中で高校改革を捉える視点

- 現行学習指導要領の熟成の先に質と公正と実行可能性を統一的に実現する。
- 学校(学力)と社会(実力)との関係を問う、コンピテンシー・ベースの改革の趣旨の再確認。社会的・政治的な自立に向けた真正で探究的な学びの必要性。単線的な社会的成功イメージの問い直しとDXの世界観の実装。
- GIGAスクール構想による公教育の構造変容と人口減少社会における持続可能な学習権保障システムの必要性。修得主義をベースにした教育プログラムとしての高校(学歴社会→学習歴社会へのシフト)。通常学級の支援学級化、僻地教育的状況の一般化、コロナ禍の時のような登校できない状況の一般化。孤立化ではなくネットワーク化により、新たな高校コミュニティ、高校生コミュニティを創出する。
- 経済政策(人材育成)に解消されない教育政策(市民形成、人間形成)としての意味。自由と選択、多様化の中で問われる共通性(コモン)、みんなが集わされることの意味。市民形成と異質な他者(ヒト・モノ・世界)との出会いの重要性。能力増強ではなく能力発達・人間的成長における不利益やわからなさ・気持ち悪さ(いい意味でのモヤモヤ)の意味の再確認(ネガティブ・ケイパビリティの重要性)。

1 質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方

- 生成AIが発展する状況の下、知識の概念としての習得や深い意味理解を促し、学ぶ意味や社会とのつながりが重要となる中、そうした授業改善に直結する学習指導要領とするための方策（特に、各教科等の中核的な概念等を中心に、目標・内容を一層構造化）
- 目標・内容の記載に表形式等を活用すること、学校種間・教科等間の関係を俯瞰しやすくすることのほか、デジタル技術を活用した工夫の在り方
- 重要な理念の関係性の整理（「主体的・対話的で深い学び」、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」、「学習の基盤となる資質・能力」等）
- デジタル学習基盤の活用を前提とした、資質・能力をよりよく育成するための各教科等の示し方
- 学習改善・授業改善に効果的な評価の観点や頻度、形成的・総括的評価の在り方（特に、「主体的に学習に取り組む態度」をはじめ観点別学習状況の把握をより豊かな評価につなげるための改善）

3 各教科等やその目標・内容の在り方

- 小中高等学校を通じた情報活用能力の抜本的向上を図る方策（生成AI等に関わる教育内容の充実、情報モラルやメディアリテラシーの育成強化を含む）
- 質の高い探究的な学びを実現するための「総合的な学習の時間」、「総合的な探究の時間」の改善の在り方（情報活用能力の育成との一体的な充実等を含む）
- 高等教育段階でデジタル・理数分野への学部転換等の取組が進む中での、初等中等教育段階における文理横断・文理融合の観点からの改善の在り方
- 生成AIの活用を含めた今後の外国語教育の在り方や、手軽に質の高い翻訳も可能となる中での外国語を学ぶ意義についての考え方
- 教育基本法、学校教育法等に加え、こども基本法の趣旨も踏まえた主体的に社会参画するための教育の改善の在り方
- 多くの教科・科目の構成の改善が行われた高等学校教育について、その一層の定着を図るとともに、職業教育を含めた今後の改善の在り方
- 特別支援学級や通級指導に係る特別の教育課程、自立活動の充実等を含む、障害のある子供の教育的ニーズに応じた特別支援教育の在り方
- 幼児教育と小学校教育との円滑な接続の改善の在り方、設置者や施設類型を問わず、幼児教育の質の向上を図る共通の方策

2 多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方

- 興味・関心や能力・特性に応じて子供が学びを自己調整し、教材や方法を選択できる学習環境デザインの重要性、デジタル学習基盤を前提とした新たな時代にふさわしい学びや教師の指導性の在り方
- 教師に「余白」を生み、教育の質の向上に資する可能性も含めた、子供たちの可能性が輝く柔軟な教育課程編成の促進の在り方（各種特例校制度等を活用しやすくすること、標準授業時数に係る柔軟性、学習内容の学年区分に係る弾力性、単位授業時間や年間の最低授業週数の示し方）
- 高等学校の生徒の多様性に応える柔軟な教育課程の実現のための、全日制・定時制・通信制を含めた諸制度の改善の在り方
- 不登校児童生徒や特定分野に特異な才能のある児童生徒など、各学校が編成する一つの教育課程では対応が難しい子供を包摂するシステムの構築に向けた教育課程上の特例等の在り方

4 教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策

- 教育課程の実施に伴う過度な負担や負担感が生じにくい在り方（学習指導要領や解説、教科書、入学者選抜、教師用指導書を含む）
- 現在以上に増加させないことを前提とした年間の標準総授業時数の在り方、教育課程の実施に伴う負担に留意した上での、現代的な諸課題を踏まえた様々な教育の充実の在り方
- 新たな学びにふさわしい教科書の内容や分量、デジタル教科書の在り方
- 情報技術など変化の激しい分野において、教師の負担軽減を図りつつ最新の教育内容を扱うことを可能とするための方策
- 各学校での柔軟な教育課程編成を促進し、多様な取組の展開に資する、教育委員会への支援強化、指導主事等の資質・能力の向上の在り方
- コミュニティ・スクールを含む地域や家庭との連携・協働を促進しつつ、過度な負担を生じさせずにカリキュラム・マネジメントを実質化する方策
- 学習指導要領の趣旨・内容について、保護者をはじめ社会全体と共有するとともに、学校種を超えて一人一人の教師に浸透を促す方法の在り方

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」（2024年12月25日）

目次

本特別部会においては、令和6年12月の文部科学大臣による諮問を受け、初等中等教育分科会や教育課程部会への報告を交えつつ、教育課程の枠組みに関する事項や教科横断的な事項を中心として審議を行ってきた。今般、11回にわたる検討の結果を暫定的に取りまとめ、今後の本特別部会における更なる検討の深化や各WG等での検討の前提として整理した。

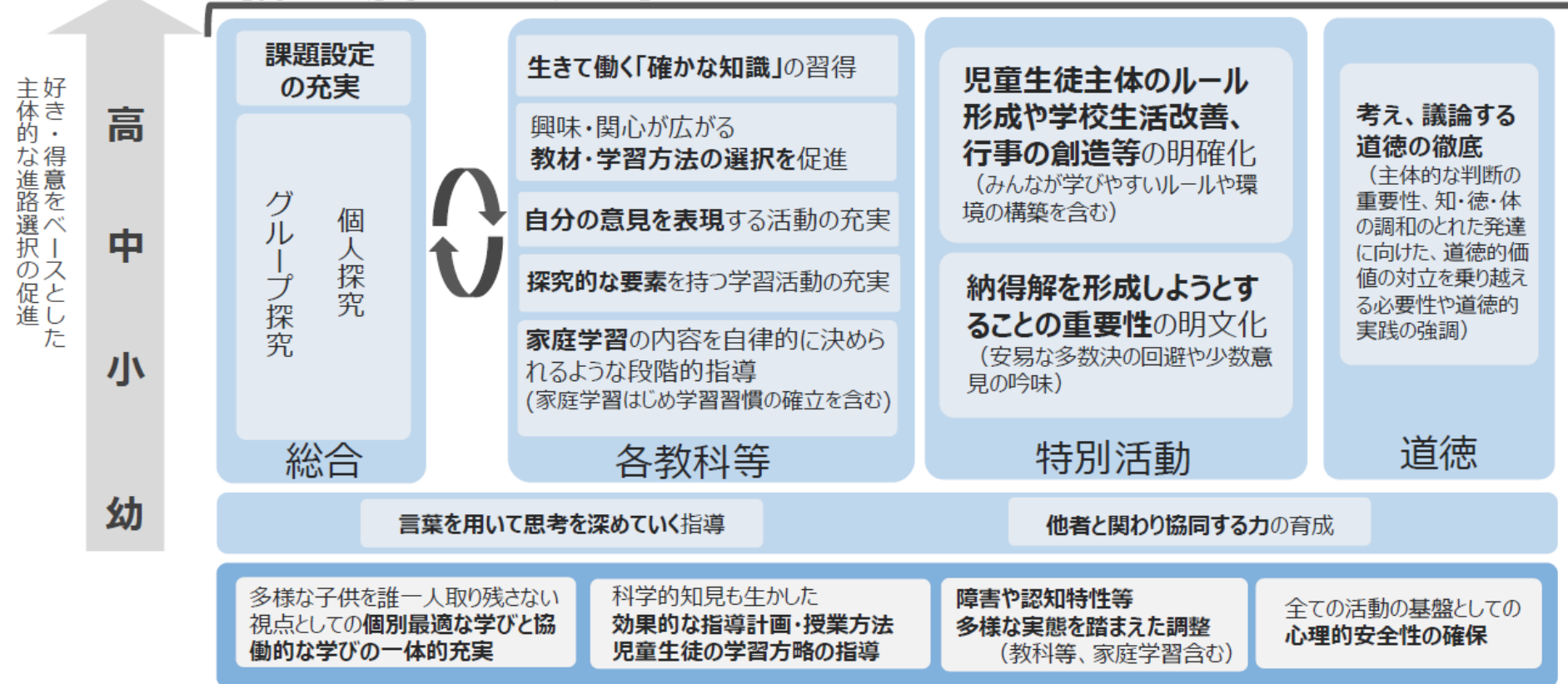
第一章 次期学習指導要領に向けた基本的な考え方 … P2	第四章 情報活用能力の抜本的向上と質の高い探究的な学びの実現 … P47
第二章 質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方 … P7	(1) 情報活用能力の抜本的向上 … P48
(1) 中核的な概念等を活用した一層の構造化・表形式化・デジタル化 … P8	(2) 質の高い探究的な学びの実現 … P55
(2) 「学びに向かう力、人間性等」の再整理 … P15	第五章 「余白」の創出を通じた教育の質の向上の在り方 … P62
(3) 「見方・考え方」の再整理 … P19	第六章 豊かな学びに繋がる学習評価の在り方 … P70
(4) デジタル学習基盤を前提とした学びの在り方 … P22	第七章 その他諮問で提起された事項の在り方 … P79
学習指導要領と「個別最適な学びと協働的な学び」の関係の在り方	(1) カリキュラム・マネジメントの在り方 … P80
第三章 多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方 … P25	(2) 高等学校入学者選抜 … P82
(1) 検討の前提（児童生徒の実態と現行制度の枠組み）… P26	(3) 産業教育 … P84
(2) 義務教育段階（「調整授業時数制度」の創設等）… P30	(4) 特別支援教育 … P90
(3) 高等学校段階における教育課程の柔軟化 … P35	(5) 幼児教育 … P96
(4) 個別の児童生徒に係る教育課程の編成・実施の仕組み … P42	(6) 子供のより主体的な社会参画に関わる教育の改善 … P100
	第八章 今後の検討スケジュールや検討の在り方等 … P104
	審議経過 … P107

「主体的・対話的で深い学び」の実現を通じた

自らの人生を舵取りする力 と 民主的で持続可能な社会の創り手 育成 (今後の検討イメージ)



【各教科等での検討イメージ】



学びをデザインする高度専門職としての教師 「裁量的な時間」をはじめ柔軟な教育課程による余白

デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備 総合的な勤務環境整備

※本イメージ図は、自らの人生を舵取りする力と民主的で持続可能な社会の創り手育成という今後の検討の一部を資料化したものであり、学習指導要領の改訂に関わる全ての要素を網羅する性質のものではない

次期学習指導要領の改訂論議の中で高校改革を捉える視点

- 現行学習指導要領の熟成の先に質と公正と実行可能性を統一的に実現する。
- 学校(学力)と社会(実力)との関係を問う、**コンピテンシー・ベースの改革の趣旨の再確認**。社会的・政治的な自立に向けた真正で探究的な学びの必要性。単線的な社会的成功イメージの問い直しとDXの世界観の実装。
- GIGAスクール構想による公教育の構造変容と人口減少社会における持続可能な学習権保障システムの必要性。修得主義をベースにした教育プログラムとしての高校(学歴社会→学習歴社会へのシフト)。通常学級の支援学級化、僻地教育的状況の一般化、コロナ禍の時のような登校できない状況の一般化。孤立化ではなくネットワーク化により、新たな高校コミュニティ、高校生コミュニティを創出する。
- 経済政策(人材育成)に解消されない教育政策(市民形成、人間形成)としての意味。自由と選択、多様化の中で問われる共通性(コモン)、みんなが集わされることの意味。市民形成と異質な他者(ヒト・モノ・世界)との出会いの重要性。能力増強ではなく能力発達・人間的成長における不利益やわからなさ・気持ち悪さ(いい意味でのモヤモヤ)の意味の再確認(ネガティブ・ケイパビリティの重要性)。

学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「**社会に開かれた教育課程**」の実現

各学校における「**カリキュラム・マネジメント**」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共」の新設など
各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「**アクティブ・ラーニング**」）の視点からの**学習過程の改善**

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成
知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための学習過程の質的改善

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

※高校教育については、些末な事実に基づく知識の暗記が大学入学選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

コンピテンシー・ベースの趣旨の再確認

《コンピテンシーベースの改革の原点》

- ・ 後期近代、ポスト近代、ハイ・モダニティとも形容される現代社会の要請、特に産業界からの人材育成要求を受けて、「コンピテンシー（competency）」（職業上の実力や人生における成功を予測する能力）の育成を重視する傾向（コンピテンシー・ベースの教育改革）が世界的に展開。
- ・ コンピテンシー・ベースの改革は、1990年代に顕在化する産業構造と労働市場の変化を受けたカリキュラム改造運動と見ることができる。

（例）1990年代の米国のスタンダード運動は、職業教育からキャリア教育（「大学や仕事へのレディネス」の育成）への転回など、知識経済下で汎用的能力を志向するコンピテンシー・ベースの改革への芽を内包。2000年代以降、OECDは、DeSeCoプロジェクトを展開し「キー・コンピテンシー」の枠組みを提起。様々な国や機関により、21世紀型スキルの枠組みも次々と提示された。

《現行学習指導要領の受け止めと課題》

- ・ 内容だけでなくという意識、学習者主体といった意識は高まっているが、その具体化において形式的対応になっていないか（コンピテンシー・ベースはコンテンツ・フリーではない）。
- ・ カリキュラム・マネジメントも、「総合的な学習（探究）の時間」等の充実や個別の教科課程経営になるのではなく、学校教育目標（人材・市民・人物像を見据えた、めざす子どもの姿）に向けた教育課程経営として充実させていくことが重要。
- ・ 学びの先に人間的成長を実現するものとして、各教科、教科外を含め、それぞれの特質を生かした教育課程全体での成長保障のカリキュラム改革としての趣旨を再確認することが必要。その中で教科観が問い直される。

新しい学力・能力が強調される背景

- 第四次産業革命期ともいわれる、変化の激しい現代社会、労働者として、また、生活者や市民として、さまざまな文脈で他者と協働しながら「正解のない問題」に対応する力や、生涯にわたって学び続ける力など、高度な知的・社会的能力が必要とされてきている。
- ドリブルやシュートの練習(ドリル)がうまいからといってバスケットの試合(ゲーム)で上手にプレイできるとは限らない。ゲームで活躍できるかどうかは、刻々と変化する試合の流れ(本物の状況)の中でチャンスをものにできるかどうかにかかっており、そうした感覚や能力は実際にゲームする中で可視化され、育てられていく。ところが、従来の学校において、子どもたちはドリルばかりして、ゲーム(学校外や将来の生活で遭遇する本物の活動)を知らずに学校を去ることになってしまっている。
→「真正の学習(authentic learning)」(本物の学び)の必要性。

その教科の一番おいしいプロセスを子どもたちにゆだねる「教科する(do a subject)」授業へ(質が高くてかつ、深く重い学びへの志向性)。

表. 学力・学習の質的レベルに対応した課題例、および適合的な教具とメディアの使用法

	教具とメディアの使用法	国語	社会	数学	理科	英語
「知っている・できる」レベル	問題集とドリルプリント AIによる個別最適化学習のためのタブレット	漢字を読み書きする。 文章中の指示語の指す内容を答える。	歴史上の人名や出来事を答える。 地形図を読み取る。	図形の名称を答える。 計算問題を解く。	酸素、二酸化炭素などの化学記号を答える。 計器の目盛りを読む。	単語を読み書きする。 文法事項を覚える。 定型的なやり取りをする。
「わかる」レベル	教科書、黒板とノート、ホワイトボードとワークシート 電子化された教材パッケージ、電子黒板、ノートやホワイトボードやワークシートとしてのタブレット	論説文の段落同士の関係や主題を読み取る。 物語文の登場人物の心情をテキストの記述から想像する。	扇状地に果樹園が多い理由を説明する。 もし立法、行政、司法の三権が分立していなければ、どのような問題が起こるか予想する。	平行四辺形、台形、ひし形などの相互関係を図示する。 三平方の定理の適用問題を解き、その解き方を説明する。	燃えているろうそくを集気びんの中に入れると炎がどうなるか予想し、そこで起こっている変化を絵で説明する。	教科書の本文で書かれている内容を把握し訳す。 設定された場面で、定型的な表現などを使って簡単な会話をする。
「使える」レベル	史・資料、ホンモノの物や人や文献 情報収集・分析・表現やコミュニケーションのツールとしてのタブレット	特定の問題についての意見の異なる文章を読み比べ、それらをふまえながら自分の考えを論説文にまとめる。そして、それをグループで相互に検討し合う。	歴史上の出来事について、その経緯とさまざまな立場の声を紹介し、その意味を論評する歴史新聞を作成する。 ハンバーガー店の店長になったつもりで、駅前のどこに出店すべきかを考えて、企画書にまとめる。	ある年の年末ジャンボ宝くじの当せん金と、1千万本当たりの当せん本数をもとに、この宝くじの当せん金の期待値を求める。 教科書の問題の条件をいろいろと変えて発展的に問題をつくり、追究の過程と結果を数学新聞にまとめる。	クラスでバーベキューをするのに一斗缶をコンロにして火を起こそうとしているが、うまく燃え続けられない。その理由を考えて、燃え続けるためにどうすればよいかを提案する。	まとまった英文を読んでポイントをつかみ、それに関する意見を英語で書いたり、クラスメートとディスカッションしたりする。 外国映画の一幕をグループで分担して演じ、発表会を行う。

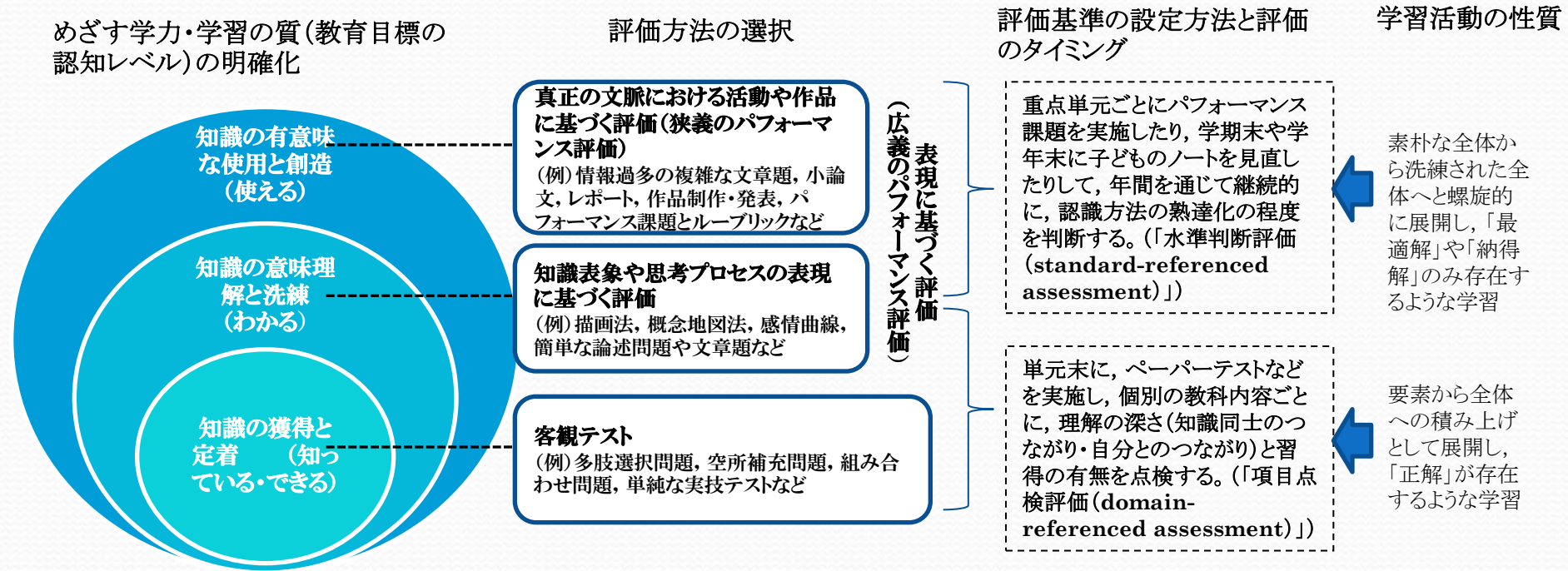
各教科の真正の課題のパターン

	社会	理科	数学	英語	国語
社会的・実用的文脈	<p>論争的な社会問題について、根拠をもって判断し、自らの主張や解決策を考える。</p> <p>例：日清・日露戦争などを振り返り、なぜ戦争が起こったのか、避けられなかったのかを検討し、戦争を防ぐために大切なことを提案する。地元の過疎化対策を提言する。</p>	<p>日常的な自然事象を科学的に説明したり、科学技術が関係する実社会の課題について判断し解決策を考えたりする。</p> <p>例：免疫のメカニズムをふまえて、エイズの特効薬について予想する。火事で破壊された森の植林計画について自然生態系への影響を判断する。</p>	<p>現実世界の事象や問題を数学化し、問題を解決したり変化を予測したりする。</p> <p>例：文化祭でたこ焼き屋を出店するのに、過去のデータから一定の利益を上げつつ安い価格を設定する。データをもとにCO₂排出量を予想するモデルを考案し、地球温暖化を考える。</p>	<p>日常生活で直面しそうな場面で、相手意識をもって自分の言いたいことを英語で表現し伝え合う。</p> <p>例：地元の商店街に配布すべく、地元の観光食べ歩きマップを使った英語での会話問答集を作成する。オンラインでつないで海外の姉妹校の生徒に日本のおすすめスポットを紹介する。</p>	<p>実用的テキストを読み解き作成したり、他者と論理的に意思疎通したり議論したりする。</p> <p>例：読書を推進するための取り組みを全校生徒に提案するために、資料やデータを収集・参照したりしながら、自分の考えをまとめる。社会問題について討論する会を開く。</p>
学問的・文化的文脈	<p>事象や史料を批判的に読み解き、根拠を明らかにしながら解釈や結論を導き出す。</p> <p>例：アニメの舞台のモデルがどの地域なのかを自然環境や人間描写などから推理する、異なる立場から書かれた史料を読み比べて、解釈の別れる歴史上の出来事の真相を探る。</p>	<p>問いや仮説を検証するために必要な実験手順を考えたり、事実から得られたことを考察したり、さらなる検証手順を考えたりする。</p> <p>例：静止摩擦力について学んだあと、動摩擦力について調べる実験を計画・実施し結果を考察し、実験を練り直す。</p>	<p>数学的な問題や命題を論証し、筋道立てて説明し、統合的・発展的に問いを見出す。</p> <p>例：三角形の面積を求める様々な公式の論証過程をわかりやすく説明・表現する。教科書の例題や適用題から数値や条件を変えて問題をつくり、算額風にその解答と解説を作成する。</p>	<p>英語で書かれた専門的なテキストを読み解き、パブリックな場面で論理的に議論を組み立て、コミュニケーションする。</p> <p>例：教科書本文の内容と、それと異なる見解を記した英文を読み比べ、英語で各テキストの内容を要約しつつ、自分の意見を論理的にエッセイにまとめる。</p>	<p>学問的・古典的テキストについて、複数のテキストを読み比べたりしながら、解釈や主題への理解を深める。</p> <p>例：教科書のテキストと関連するテキストを素材に、その主題に関して、論拠を挙げて意見文をまとめる。古文の一場面をグループで劇化する。</p>

内容知優勢

方法知優勢

学力・学習の質と評価方法との対応関係



(出典:石井英真「学力向上」篠原清昭編著『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房、2012年。)

「考える力を育てるかどうか」という問い方ではなく、「どのレベルの考える力を育てるのか」という発想で考えていかねばならない。特に、内容の習得をめざす中での思考力と、学んだことをつなぎあわせて文脈に対応して使われる思考力とのレベルの違いを認識しておく必要がある。

c. f. ブルームの目標分類学における、「適用 (application)」(特定の解法を適用すればうまく解決できる課題)と「総合 (synthesis)」(論文を書いたり、企画書をまとめたりと、これを使えばうまくいくという明確な解法のない課題に対して、学んだ知識を総動員して取り組まねばならない課題)という「問題解決」のレベルの違い。

次期学習指導要領の改訂論議の中で高校改革を捉える視点

- 現行学習指導要領の熟成の先に質と公正と実行可能性を統一的に実現する。
- 学校(学力)と社会(実力)との関係を問う、コンピテンシー・ベースの改革の趣旨の再確認。社会的・政治的な自立に向けた真正で探究的な学びの必要性。単線的な社会的成功イメージの問い直しとDXの世界観の実装。
- GIGAスクール構想による**公教育の構造変容**と**人口減少社会における持続可能な学習権保障システム**の必要性。修得主義をベースにした教育プログラムとしての高校(学歴社会→学習歴社会へのシフト)。通常学級の支援学級化、僻地教育的状況の一般化、コロナ禍の時のような登校できない状況の一般化。孤立化ではなくネットワーク化により、新たな高校コミュニティ、高校生コミュニティを創出する。
- 経済政策(人材育成)に解消されない教育政策(市民形成、人間形成)としての意味。自由と選択、多様化の中で問われる共通性(コモン)、みんなが集わされることの意味。市民形成と異質な他者(ヒト・モノ・世界)との出会いの重要性。能力増強ではなく能力発達・人間的成長における不利益やわからなさ・気持ち悪さ(いい意味でのモヤモヤ)の意味の再確認(ネガティブ・ケイパビリティの重要性)。

GIGAスクール構想の先の「多層的な教室」と学校像の分岐点①:

- ICT活用、修得主義、個別最適化された学び、働き方改革、これらは「学校のスリム化」を招きがち。学校の丸抱え体質は問題だが、捨てるてはいけないものを見極める必要がある(生活の場としての学校、成長につながる学びの保障)。
- 「オンライン学習」は、「授業」と「自学」の間の「遠隔学習支援機能」(クラウド上のもう一つの教室)の増設問題として捉える。対面とオンラインの「多層的な教室」を前提とした授業や学校生活と表現してもよい(授業で対面で家庭でオンラインという二元論でない)。教室での対面でのコミュニケーション(一つ目の教室)が難しくなっても、zoom等を使えば顔も見ながらオンライン同時双方向でやり取りできる(二つ目の教室)、さらに、それが落ちてしまったとしても、学校HPやGoogleクラスルームなどのオンラインのプラットフォーム(三つ目の教室)があれば、課題のやり取りを通して、文通的、通信添削的なやり取りで学びを支援できるし、共同編集機能を使えば、顔は見えないけれど、リアルタイムで他の子どもたちとつながりながら一緒に学んでいる感覚を持つこともできる。
- 単元や授業が終わっても、オンラインの教室があれば、さらに学びや追究を続けたい子どもたちでグループを立ち上げて学び続けていくことができる。そして、時に教師も伴走しながら、オンラインのもう一つの生活世界(健全な裏サイト)で子どもたちが自主的に学びを続け、そこでの追究から、授業という対面の公共世界(教育的な舞台)で教師の指導の下で対話し深めていく問いや素材が生まれてくることもあるだろう。一人一人の日記や学級日誌の中から、クラスの課題が生まれてくるように。

GIGAスクール構想の先の「多層的な教室」と学校像の分岐点②:

- オンライン上の教室は、学校外のSNS上の私的なやり取りの場を、もっとパブリックな形にしたものとも考えることもでき、時にモラルを欠いて傷つけあうことにもなってしまうネット上での私的なコミュニケーションのあり方を、より成熟したものへと組み替えるための練習の場と捉えうる。
- オンラインでも教室に参加しているという状況は、「通学」や「不登校」の観念も変えていけよう。さらに、学校という場におけるフレックスな学習の時間(ドリル的な勉強は授業というよりも寺子屋的にやれる)、家庭における支援付き自学(オンラインで仲間や学校や社会とつながりながら自由研究や宿題に取り組む)というオプションを想定すると、子どもたちの自律的で協働的な学びの時間を拡大する手立ても考えられるだろう。
- 「小さな修得主義」(知識・技能の習得を軸にした検定試験的なカリキュラム)と「自習室」(個別化・早修・寺子屋的)の方向性か、「大きな修得主義」(知識・技能を総合的に使いこなす挑戦的な課題を軸としたプロジェクト型のカリキュラム)と「自主ゼミ」(個性化・拡充・大学的)の方向性か。

GIGAスクール構想の可能性と注意点

ICTを文具としてとけ込ませること、アナログとデジタルを自在にスイッチしながら活動や学習の生産性を高めたり、できることの幅を拡張したりすること(一人ひとりの多様なニーズに応え持ち味を生かす)、多層的な学習・生活空間をよりよく生きること(知的で文化的でパブリックなデジタル生活)、それらの先に、子どもの学習・生活環境が再構成され、真に自由で自立した個を育てる学びと対話的で共生的な空間が生まれること(ラーニング・エコシステムの構築)が重要。

↑子ども主語の学びは、自由に各自で、子ども任せでというわけではなく、教室の協働性(学級づくり)や教師による足場かけや見極めやゆさぶり(授業づくり)の上に成立する。

深い学びにとって、デジタル化、自由さ(快適さ)、情報量の多さや情報処理の速さが逆に働くこともあり、アナログの強み、認知的負荷(外界から受ける抵抗)、焦点化と中断を意識することが重要。

ICTの学習方法面の工夫にとどまらず、「DX」という社会観・世界観を見せていくような、真正の学びとの接続を。

3. 3本の政策と実現に向けたロードマップ

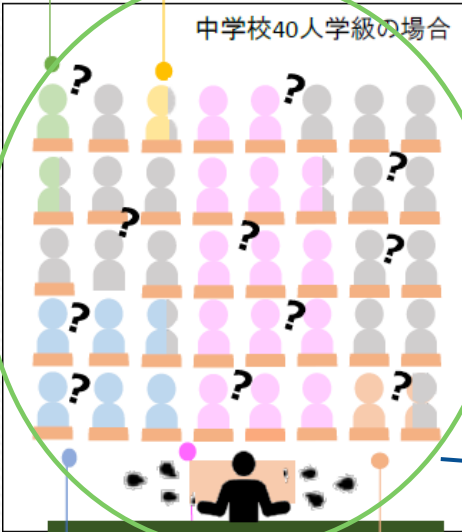
【政策1】子供の特性を重視した学びの「時間」と「空間」の多様化＜目指すイメージ①＞

すべての子供たちの可能性を最大限引き出すことを目指し、子供の認知の特性を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「そろえる」教育から「伸ばす」教育へ転換し、子供一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を実現するとともに、一つの学校がすべての分野・機能を担う構造から、協働する体制を構築し、デジタル技術も最大限活用しながら、社会や民間の専門性やリソースを活用する組織(教育DX)への転換を目指す。これを実現するためには、皆同じことを一斉にやり、皆と同じことができることを評価してきたこれまでの教育に対する社会全体の価値観を変えていくことも必要となる。

子供たちが多様化する中で紙ベースの一斉授業は限界

発達障害の可能性のある子供

特異な才能のある子供



不登校 不登校傾向

日本語を家であまり話さない子供

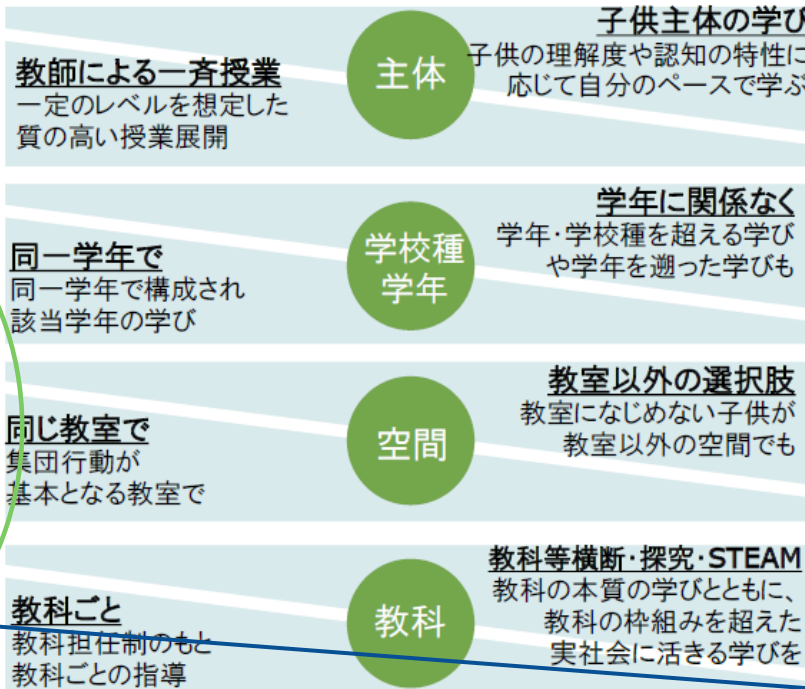
家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供

※語彙や読解力の低下は重要な教育課題

※子供の数の考え方・定義等については、スライド10の出典と同様。

※限られたリソースの中、個別最適な学び・協働的な学びを追求している学校や教師も沢山いるが、現リソースでは一般的に限界があることを想定して図式化

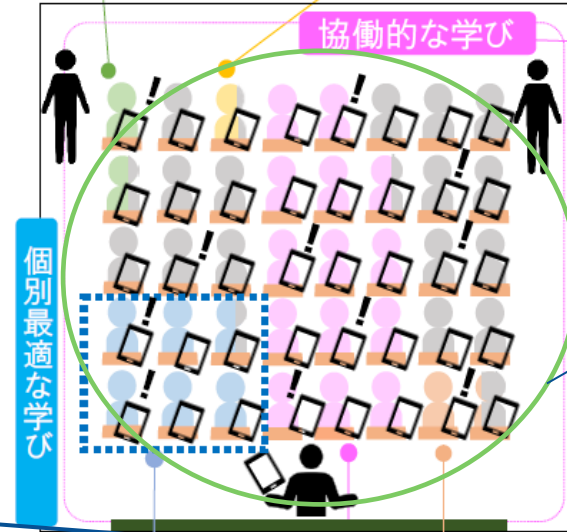
2017年改訂により資質・能力重視の教育課程へと転換



多様な子供たちに対してICTも活用し個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実

発達障害等
自分の特性を理解し、ICTを活用しながら、自分に合った学び方で進めることができる

特異な才能のある子供
特異な才能のある分野を伸ばすため、大学や研究機関で学ぶことができる



不登校・不登校傾向
学校の中に通常の学級から離れて学習ができる学びの場、教育支援センター、不登校特例校、夜間中学、フリースクールをはじめ、NPOや民間等の力も活かしつつ、従来の学び方とは別の形で学ぶことができる

日本語を家であまり話さない子供
特別なカリキュラム組み、ICTも活用しながら、日本語習得と同時に学びを進めることができる

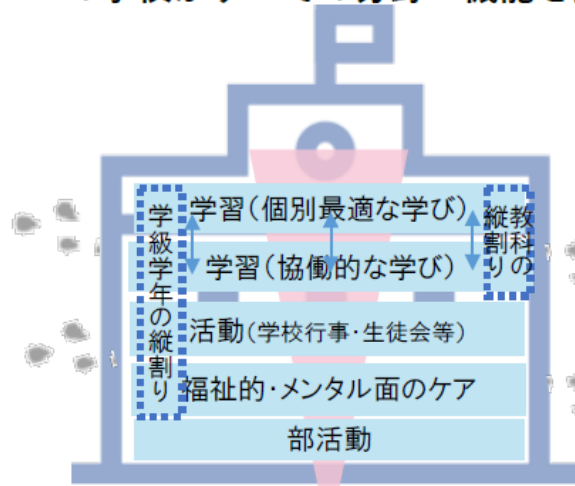
家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供
タブレット等の活用により自分のペースで着実に自分の理解に応じて学びを進めることができる

内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 (CSTI) 教育・人材育成ワーキンググループ「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」(2022年6月2日)

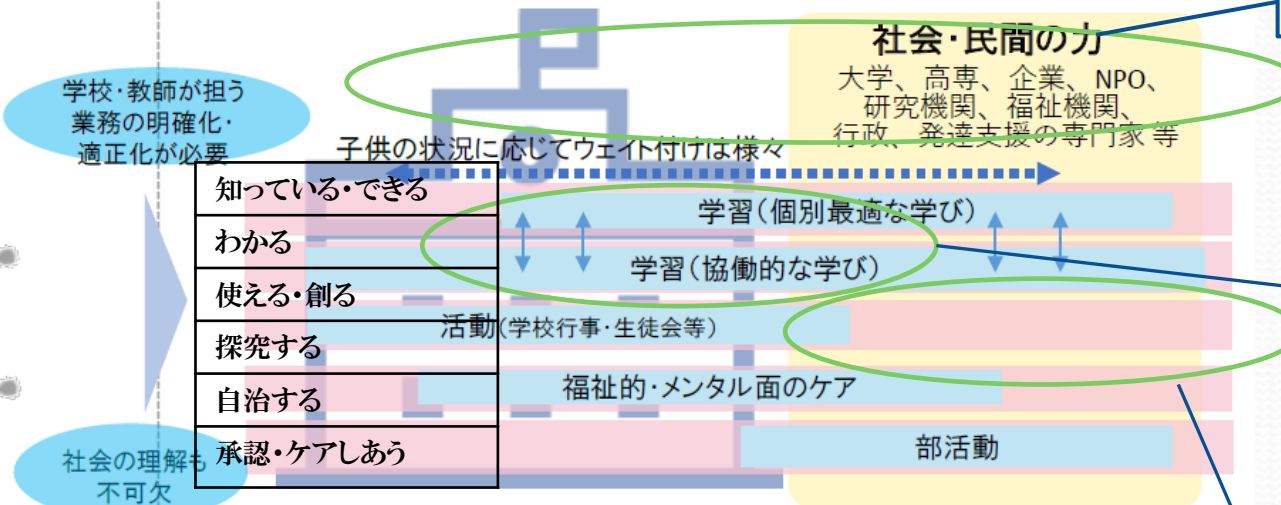
恒常的にハイフレックスでは学習効果に乏しいことも考慮に入れておくべき。

教員数を充実させ、クラスサイズを小さくすることが重要だろう(「学級」の共生的再構築を含んで)。

一つの学校がすべての分野・機能を担う状態



分野や機能ごとの多層構造・協働体制、様々なリソースを活用



デマンドサイドからの改革で学校や教員への投資は？教育の質と公共性の担保は？

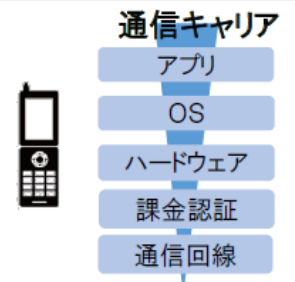
個別最適な学びと協働的な学びの、学びの質における境目はどこか？
学校の本務は学習権保障であり、そこ(特に知性の教育)が空洞化しないよう注意が必要。

塾や習い事といった学びの場以上に、社会教育の場の充実が重要。

- 学級という集団の中で質の高い一斉授業を行うことにより、体系的なカリキュラムの実施や対話や協働を重視した学びが可能。
- 学校の責任のもと、教科指導、特別活動、部活動などを通して全人的教育を行い、福祉的機能も担う
- △ 手続き的・形式的な公正やルールが重視され、過度の同調性や画一性をもたらすことも
- △ 子供たちの認知の特性や関心に応じた個別性の高い教育を実現するためには、時間や人材などのリソースが不十分

- △ 学び方が時間的・空間的にも多様化すると、学びの体系性や集団としての教育の機能が弱くなる可能性
→ 様々なリソースを活用するための学校の機能を強化した上、スタディログ等により子供の学びを教師が把握し伴走するとともに、協働的な学びの場を確保する必要
- △ 学びや活動などの実施主体や責任の所在が不明確になる可能性
→ 学び全体はスタディログ等で学校が把握・支援するとともに、活動ごとの責任の所在や情報の管理主体の明確化が必要
- ICTも活用し、自分のペースで学びを調整したり、学校外のリソースを活かした学びを進めたりすることが可能
- 多様な教職員集団や様々な学校外のアクターが関わることにより、子供の認知の特性・関心に応じた教育の展開が可能

△サービスの硬直化
△ユーザーの選択肢の少なさ
○責任の所在の明確さによる安定・安全性供給



アプリ開発者	アプリ
メーカー	OS
メーカー	ハードウェア
サービス会社	課金認証
通信キャリア	通信回線

- ユーザーによる最適化
- 専門化で質の向上
- △責任の所在の不明確さ

内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 (CSTI) 教育・人材育成ワーキンググループ 「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」 (2022年6月2日)

(出典)総務省 情報通信白書(平成24年度版)を参考に内閣府で作成

高等学校の機能と運営の再編 (石井作成)

コンソーシアム化(「旅」する高校生へ)

個別最適な単位制的運用(小さな修得主義)

オンライン学習・生活空間

当該学校

近隣の学校

地域(塾・習い事を含む)

学習活動(教科(個別的):知っている・できる、わかる)

学習活動(教科(協働的):わかる、使える・創る)

学習活動(総合:探究する)

社会的活動(特活:交わる・協働する・自治する)

部活動

居場所(暮らす、承認・ケアし合う)

知育の協働化と徳育の個性化(大きな修得主義・共生空間)

複数の学校や地域による協働運営

教育課程の履修原理—履修主義と修得主義

		履修主義・年齢主義	修得主義・課程主義
履修原理		履修主義： 所定の教育課程を、その能力(または心身の状況)に応じて、一定年限の間、履修すればよい。	修得主義： 所定の課程を履修して、目標に関して一定の成果を上げることが求められる。
進級(卒業)原理		年数(年齢)主義(social promotion)： 卒業要件として一定年限の在学を要求し、grade は、「在学年数(学年)」を意味する。	課程主義(merit promotion)： 卒業要件として一定の課程の修了を要求し、grade は、「教材習得の段階(等級)」を意味する。原級留置(留年)もありうる。
学校の中心的な役割		社会性・人格の育成、全面発達(多元的価値)、保護(ケア)・社会的包摂機能 共同体としての生活集団を軸とした機関	知識・技能の獲得、知的発達(一元的価値)、能力向上・水準保障機能 機能的で学習集団を軸とした機関
カリキュラム論上の立場	義務教育制度 成立期	経験主義(子どものニーズに準拠)との親和性 方向目標と相対評価や個人内評価(構造化されていないカリキュラム) 同じ年齢集団で(個々の子どものニーズに合わせて異なる内容や進級基準もありうる)	系統主義(目標・内容に準拠)との親和性 到達目標と目標準拠評価(構造化されたカリキュラム) 同じ内容を(内容の習熟度に合わせて異なる年齢の子どもたちが集まることもありうる)
	現代	系統主義の学力保障と平等化の側面との親和性	経験主義の個性尊重と自由化の側面との親和性

学びの個別化と個性化

	個別化	個性化
基本的な方向性	<p>教育内容や学習進度や進級水準の能力に応じた多様化</p> <p>「指導の個別化」(子どもの個性(適性)に応じて学習方法の最適化を図ることで、教科の学習内容の中で習得させたい知識・技能の確実な定着をめざす)</p>	<p>ひとりひとり(individual)の内的なニーズや自発性に応じた多様化</p> <p>「学習の個性化」(子どもの興味・関心を生かしながら、教科の目標に迫るような思考・判断や認識を深めたり、社会の中で自己を活かせるような「生きる力」を高め、個性を育てたりしようとする)</p>
個人差の捉え方	学習にかかる時間の差(量的差異)	興味・関心や学習スタイルなどの差(質的差異)
教育形態・システムレベル	<p>既存の内容パッケージの量や水準の違い</p> <p>能力別学級編成(同一性)、自由進度学習</p>	<p>その子に応じた内容自体の組み換え</p> <p>同年齢集団、異年齢集団等の多様な集団編成(複数性)、自由テーマ学習</p>
指導法レベル	学習進度や学習到達度に応じて個別指導を行う	その子に応じて教授法や学習活動や表現方法を工夫する
評価とカリキュラムのあり方	<p>知能や学業成績等の一元的尺度</p> <p>(量的に進める直線的)プログラム学習と目標標準評価</p>	<p>多重知能や個性(持ち味や強み)等の多元的尺度</p> <p>(質的に深める多面的な)プロジェクト学習と個人内評価</p>
発展学習の形態	早修(acceleration)(より早く進む)	拡充(enrichment)(より広く深く学ぶ)

表.学校で育成する資質・能力の要素の全体像を捉える枠組み(出典:石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015年。)

能力・学習活動の階層レベル(カリキュラムの構造)		資質・能力の要素(目標の柱)			
		知識	スキル	情意(関心・意欲・態度・人格特性)	
			認知的スキル	社会的スキル	
教科等の枠づけの中での学習	知識の獲得と定着(知っている・できる)	事実に知識、技能(個別的スキル)	記憶と再生、機械的実行と自動化	学び合い、知識の共同構築	達成による自己効力感
	知識の意味理解と洗練(わかる)	概念的知識、方略(複合的プロセス)	解釈、関連付け、構造化、比較・分類、帰納的・演繹的推論		内容の価値に即した内発的動機、教科への関心・意欲
	知識の有意味な使用と創造(使える)	見方・考え方(原理と一般化、方法論)を軸とした領域固有の知識の複合体	知的問題解決、意思決定、仮説的推論を含む証明・実験・調査、知やモノの創発(批判的思考や創造的思考が深く関わる)	プロジェクトベースの対話(コミュニケーション)と協働	活動の社会的レリバンズに即した内発的動機、教科観・教科学習観(知的性向・態度)
学習の枠づけ自体を学習者が決定・再構成する学習	自律的な課題設定と探究(メタ認知システム)	思想・見識、世界観と自己像	自律的な課題設定、持続的な探究、情報収集・処理、自己評価		自己の思い・生活意欲(切実性)に根差した内発的動機、志やキャリア意識の形成、
	社会関係の自治的組織化と再構成(行為システム)	人と人との関わりや所属する共同体・文化についての意識、共同体の運営や自治に関する方法論	生活問題の解決、イベント・企画の立案、社会問題の解決への関与・参画	人間関係と交わり(チームワーク)、ルールと分業、リーダーシップとマネジメント、争いの処理・合意形成、学びの場や共同体の自治的組織化と再構成	社会的責任や倫理意識に根差した社会的動機、道徳的価値観・立場性の確立

※太字部分は、それぞれの能力・学習活動のレベルにおいて、カリキュラムに明示され中心的に意識されるべき目標の要素。

※認知的・社会的スキルの中身については、学校ごとに具体化すべきであり、学習指導要領等で示す場合も参考資料とすべきだろう。情意領域については、評定の対象というより、形成的評価やカリキュラム評価の対象とすべきであろう。

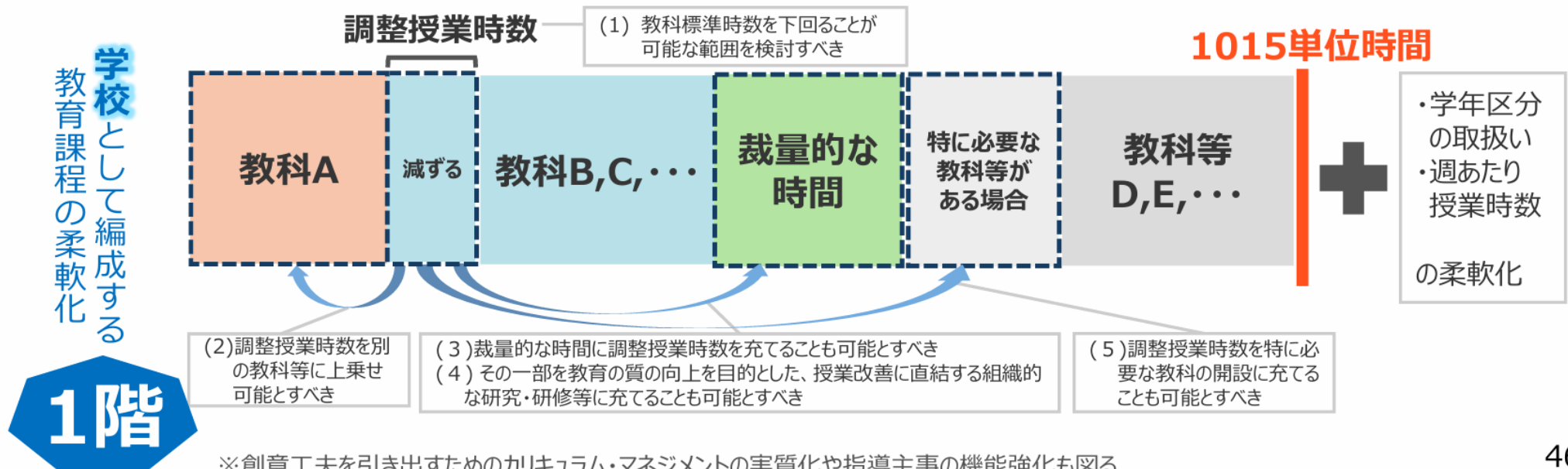
柔軟な教育課程編成の促進（小・中学校の全体イメージ）

- 多様な個性や特性、背景を有する子供に対応するため、「学校」と「個々の児童生徒」単位の柔軟化を組み合わせ、「2階建て」で複層的に包摂できる、柔軟な教育課程の仕組みの構築に向かうことが重要
- 「2階」の特例の適用がある児童生徒も、「1階」で他の児童生徒とともに学びやすくなるなど、全体としての包摂性を高める方向で制度設計する必要



教育課程部会 教育課程企画特別部会「論点整理」より

※教育委員会による支援を前提としつつ、大学等の協力も得る。全体としてデジタル技術を積極的に活用して対応



※創意工夫を引き出すためのカリキュラム・マネジメントの実質化や指導主事の機能強化も図る

高等学校の教育課程の柔軟化の仕組みの方向性（イメージ）

補足イメージ③

教育課程部会 総則・評価特別部会
第6回資料より

(週当たり授業コマ数)

1 2 3 ... 28 29 30 コマ



2 1単位の計算
50分×17コマで1単位を標準
(新しい算定による単位を便宜的に「**新単位**」という)

1 柔軟な組み替えを可能に
「各科目内容の一部または全部について他科目への移行・統合」し、科目の柔軟な組み替えを可能に
(具体例)
・理科の基礎系科目を統合
・国語科と探究を組み合わせ
・数学Ⅰと学び直しの学校設定科目を組み合わせ 等

組み替えの要件のポイント
①元の教科・科目の**目標の趣旨を損なわない**
②教育課程全体として、**組み替え前と同様の成果が期待される**
③ **カリキュラム・ポリシーとの関連で、変更の趣旨・内容を公表し、生徒・保護者等に説明する**

科目の内容の取扱い
・従前同様、生徒の実態を踏まえ特に必要な場合は「**基礎的・基本的な事項に重点を置く**」など内容を選択して扱うことが可能
・その上で、「**発展的・探究的な事項に重点を置いた選択的な取扱い**」も可能とする

5 学校設定教科・科目の単位数の上限
卒業単位に含まれる学校設定科目の単位数上限について
普通科 ⇒ 28単位
その他普通教育を主とする学科⇒36単位に増加させることの適否を検討



3 減単の考え方
・「一定の限度の下で減単可」という考え方が基本
・現在減単できない標準が**2単位の必修科目**についても、**1新単位の範囲内で減単を認める**
・各必修「**教科**」に係る科目の履修単位数の合計が**3新単位以下**となる減単は不可
(公共、芸術(音楽Ⅰ or 美術Ⅰ or 工芸Ⅰ or 書道Ⅰ)、情報Ⅰ、家庭基礎)

4 科目の履修免除の要件のポイント
①社会的信頼性が確立した外部試験により、**免除科目の知識・技能の習得が概ね判断可能**
② **振替科目等の履修により**、免除科目の資質・能力を**発展的に育成可能で、総合的な代替性**がある
③ **生徒の実態・希望を踏まえ、資質・能力の育成に大きく上回る成果が期待できる**

履修免除の対象科目
・**外国語・数学**を対象に**制度運用**を開始していくことを念頭に検討
・具体的な外部試験の種類や、履修免除に必要な級の水準等については、外国語WG及び算数・数学WGにおいて議論

6 必要な改善・質確保のための仕組み
これらの仕組みの**不適切な運用を防ぎ**、国・都道府県等・各学校が必要に応じて**改善を図り、質を確保**できるようそれぞれの役割を整理
(補足イメージ②参照)

週当たり授業時数の標準は示さない コマ

週当たり授業時数
標準を示さない
(現在週当たり30コマが標準)

次期学習指導要領の改訂論議の中で高校改革を捉える視点

- 現行学習指導要領の熟成の先に質と公正と実行可能性を統一的に実現する。
- 学校(学力)と社会(実力)との関係を問う、コンピテンシー・ベースの改革の趣旨の再確認。社会的・政治的な自立に向けた真正で探究的な学びの必要性。単線的な社会的成功イメージの問い直しとDXの世界観の実装。
- GIGAスクール構想による公教育の構造変容と人口減少社会における持続可能な学習権保障システムの必要性。修得主義をベースにした教育プログラムとしての高校(学歴社会→学習歴社会へのシフト)。通常学級の支援学級化、僻地教育的状況の一般化、コロナ禍の時のような登校できない状況の一般化。孤立化ではなくネットワーク化により、新たな高校コミュニティ、高校生コミュニティを創出する。
- 経済政策(人材育成)に解消されない**教育政策(市民形成、人間形成)としての意味**。自由と選択、多様化の中で問われる**共通性(コモン)、みんなが集わされることの意味**。市民形成と異質な他者(ヒト・モノ・世界)との出会いの重要性。能力増強ではなく能力発達・人間的成長における不利益やわからなさ・気持ち悪さ(いい意味でのモヤモヤ)の意味の再確認(ネガティブ・ケイパビリティの重要性)。

現行学習指導要領の熟成へ

- 資質・能力ベースとは、将来の社会や生活で生きて働く学力と学びを保障すること(レディネスの観点からの学力と学びの問い直し)。それはコンテンツ・フリーを意味しない(現代社会の求めからの内容・教科観の問い直し)。
- カリキュラム・マネジメントとは、一人前(目指す子ども像としての学校教育目標)を育てる観点からの、成長目標に向けた教育課程経営である。
- 主体的・対話的で深い学びとは、授業づくりの不易の再確認である(共同注視の三角形、学力の三層、目標(子どもの姿)に始まり目標(子どもの姿)に戻る)。
- 「何を教えるか」に切り込み、単元単位で重点化されたビッグアイデア(よりメタな大きな目標内容)を軸に展開する、深さ志向のカリキュラムと授業を実現する(less is more(少なく厳選された内容を深く学ぶことで、結果としてより多くを学べる)の実装)。
- 学校づくりや授業づくりにおける現場のオーナーシップの回復があってこそ、真に学習者の側の学びのオーナーシップにもつながる。
- 持続可能性(教職のブラック化問題、脱丸抱え、余裕の創出、歯抜け状況の常態化)と包摂性(不登校問題、多様性に寛容で応答的であること)の観点から学校のシステムのあり方を柔軟化しつつ、学びの質を貧弱化させないためには？

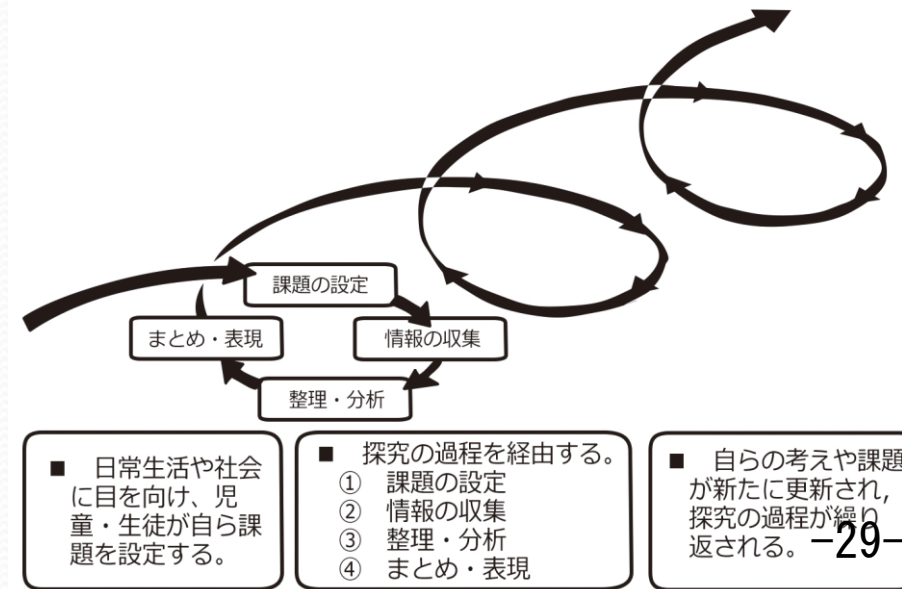
→ゆるくて深い学び(例:「個別最適」を学習形態としてよりもカリキュラム・マネジメントの次元で受け止め「個別最適な時間」を生かす、単元の大きな課題や問いを多様な道筋と柔軟な空間で深める真正で包摂的な学び、ICTも活用しつつ総合的な言語活動としてアウトプットし評価にもつなげる、それに取り組むことで自ずと日常的な教師としての力量形成につながり、観のレベルのアンラーンの機会が埋め込まれるような上達論のある教育施策)

「探究」の現在地をどう見るか？

- 総合や課題研究における「探究」について、カリキュラムの一つの核として位置付けられている学校とそうでない学校との二極化傾向、および、地域創生型探究と学問研究型探究への二極化の傾向（都市部で研究大学が近くにあると前者、山間部や離島などにおいては後者が盛ん）もありつつ、多様化している。
- 「探究」のサイクルを回すこと等、これをやっておけばよいと、学び方や成果発表の形を整えることになってはいないか。
- 総合型選抜との連結で「探究」の部活化・甲子園化（ハイパー文化部化）が進み、青天井で高度化し、高校生活が多忙化してはいないか。



高校における「探究」のルーツと教育的価値、真の進路指導（キャリア教育）と市民形成といった青年期教育としての意味を再確認する必要性。



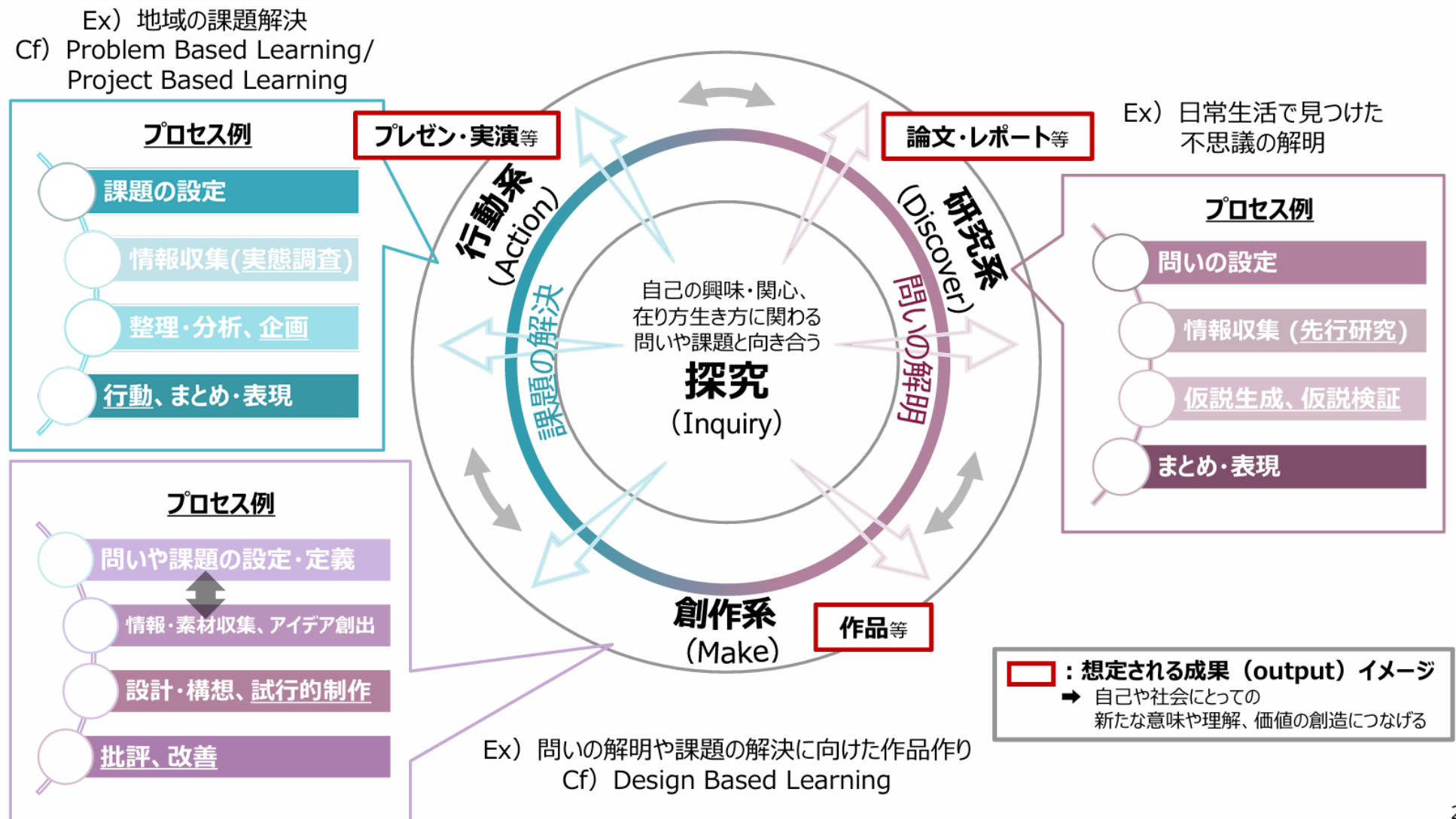
探究的な学びの多様性を捉える視点

- カリキュラム上の立場の違いは、おおよそ学問、学習者、社会のトリレンマの構造で議論されてきた。このトリレンマの構造を眼鏡にすると、高校の総合や課題研究における探究的な学びのカリキュラムを類型化することもできる。
- SSH校のように、大学等と連携した学術研究を軸とする文化部に近いものもあれば(学問の要請)、地域創生や社会問題の解決を軸とする市民活動・特別活動的なものもあるし、狭義の職業キャリア教育的なスキル学習を重視するものもある(社会の要請)。しかし、教科発展型でも特別活動型でもない「総合的な探究の時間」に固有の学びという点では、研究体験、社会体験、スキル訓練に止まらず、自己の生き方・あり方を見つめ、総合知や自分事に関心事やテーマを深めていくこと、広い意味でのキャリア教育的な性格が重視されることになる(学習者の要請)。
- 都市部で研究大学が近くにあると学問研究型が、山間部や離島に学校があると地域創生型の探究が盛んになりやすい傾向にある。中学校などでは、職場体験や製品開発や地域課題の解決等を軸にした、狭義のキャリア教育型の探究に取り組むことも多いだろう。専門高校や専門学科において、大学・専門機関や地域等と連携することで、学問性や専門性を高める形で、専門職業型の探究も盛んである。

様々な探究の在り方と探究のプロセスについて (イメージ)

総合の目標や内容は学校が定めるとされている中、様々な探究の在り方について、これまで国が示すことはしてきていないが、
 ①総合の創設から約30年が経過し、実践が蓄積されてきていること、②テーマの偏りやデジタル学習基盤の活用による質の向上が指摘されていること、③探究の態様によって想定されるプロセスが異なり、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」だけでは十分に捉えられないとの指摘があること等を踏まえ、学校の指導計画の立案や児童生徒の探究の参考とするため、様々な探究の在り方を参考資料等の形で示してはどうか。 ※子供の興味・関心に基づく（内側から外側に広がっていく）ことが前提であり、「型にはめる」といった探究につながらないように留意。また探究が硬直化しないよう、外部との連携の在り方についても今後検討。

令和7年12月26日
 教育課程部会
 総合的な学習・探究の時間
 ワーキンググループ資料より



表。「真正の学び」を創る視点(石井英真『今求められる学力と学び』放送大学教育振興会、2026年。)

①成長目標ベース(自立(人間的成長)への志向性):

「単元の「ねらい」の先に、目の前の生徒たちの人間的成長への「ねがい」をみすえているか？」

学校教育目標の意識

②パースペクティブ変容(教養(鳥瞰的視野)への志向性):

「生徒たちの生活世界に戻り自己のあり方を問う学びか？」
切実で自分事のテーマ設定の工夫や横断的・総合的な活動による深く重い学びへ(視座が上がり、視野が広がる「突き抜け」経験)

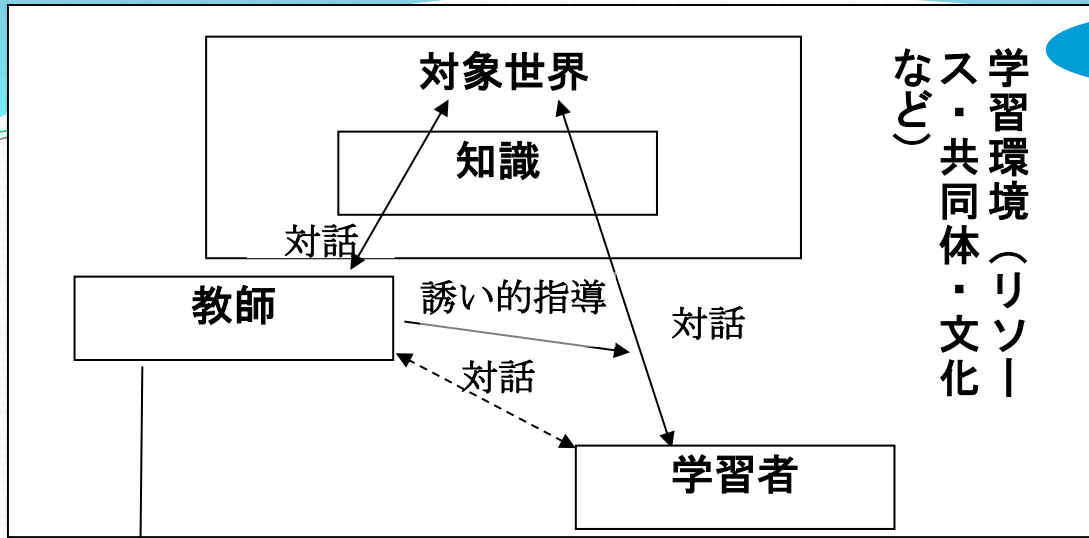
③エージェンシーの育成(自治(民主的関係)への志向性):

「生徒が正答や教師を忖度する関係を超えて、リアルな世界や問題と向かい合えているか？」

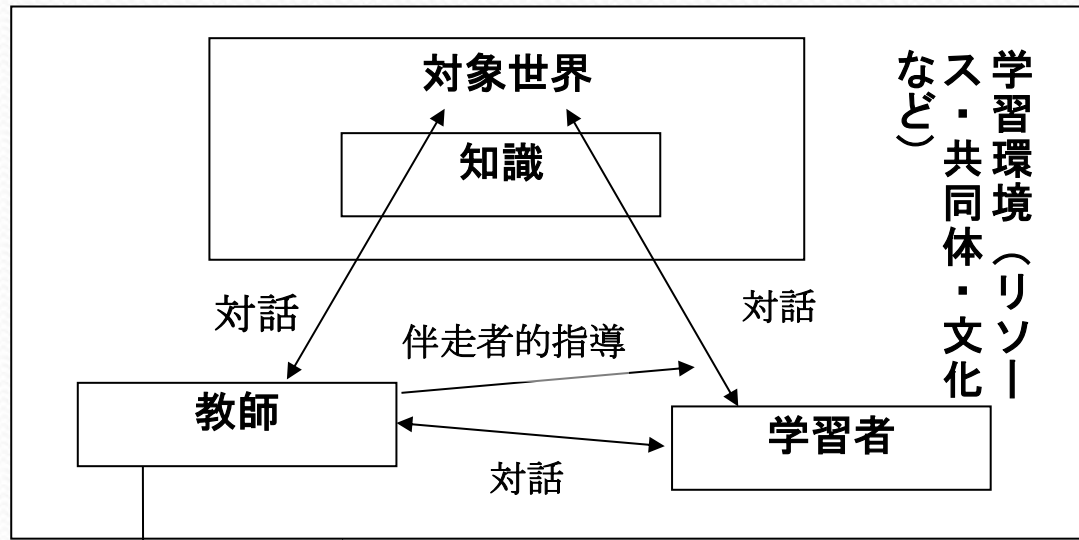
生徒が教師や学校を学び超え、ホンモノとともに歩みだす(学校学習からの卒業・自走)

教科において「探究」を追求するとは？

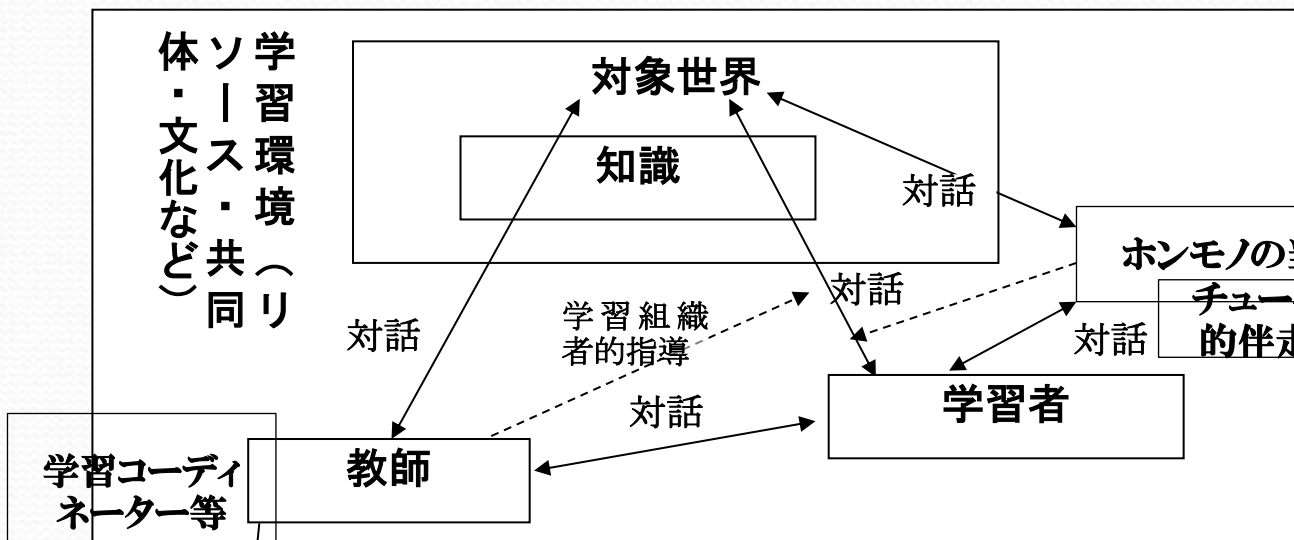
- 探究サイクルやAARサイクル等を回すという形式的対応だと、教科学習の特別活動化と教科の学びの中身の空洞化につながる。
- 探究的な学びのサイクルは、子どもたちの追究心や学びの必然性や切実性があるからこそ駆動するもの。「探究」的な学びの追究とは、内容単元より主題単元的に考えていくということであり、生徒主体での問いと答えの間の長い思考を実現していくことである。
- 教科学習における探究的な学びの追求という場合、問いや課題を子どもたちから引き出すという形にこだわる以上に、子どもが自ずと思考したくなる必然性や有意味の追求(教材研究や学習環境のデザイン)や、社会・生活とのつながりから各教科の本質や価値を問い直すことが大事。
- 子ども自身が自分事の問題について息の長い探究を行う機会は、各教科で形式的に追究するよりも、総合的な学習(探究)の時間や課題研究等を含んだカリキュラム全体で保障していくことが有効である。



共同注視



共同責任



学び超え

図. 「真正の学び」における「共同注視」関係の展開と「学び超え」の構造（筆者作成）

表.「主体性」のタキソノミー(学びへの関与と所有権の拡大のグラデーション)(筆者作成)

出口の情意



入口の情意

特別活動

総合学習

教科学習

特別活動	自治(変革人:エージェンシー)	社会関係を創りかえる
		対象世界を創りかえる
総合学習	人間的成熟(なりたい自分:アイデンティティ)	軸(思想)の形成
		視座の高まり
総合学習	自律(探究人:こだわり)	自分事への問いの深化
		問いの生成
教科学習	学び超え(生涯学習者・独立的学習者)	思考の習慣(知的性向)
		関心の広がり
教科学習	学習態度(自己調整学習者・知的な初心者)	方略的工夫
		試行錯誤
教科学習	関心・意欲	積極性(内発的動機づけ)
教科学習	表面的参加	受身(外発的動機づけ)

「探究」を核とする学校づくり

- 青年期の課題に応え、なりたい自分やキャリア意識や学習意欲が高まったり、社会・世界に積極的に働きかけて手応えを得る感覚を経験したりすることで、教科の学びへの目的意識や積極性や思考の粘り等にプラスの影響が生まれる。視座が上がればそれが認識や学力も引き上げる。
- 成長保障に向けた教育課程経営として、コンピテンシー・ベースのカリキュラム改革やカリキュラム・マネジメントの原点を再確認する。
- 「探究」の「出島」としての意味の再確認（通常の高校での学びとは別様な学びの中身と空間と関係性の中で、教師の学習観・教育観のアンラーンが起こり、教科等の在り方が自ずと問い直される）。
- 授業と部活の分断状態の焼き直しにならないために。教科の本質の問い直しと学びの変革への展望をもった授業改善の充実を。